

都道府県名	岡山県
-------	-----

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	岡山市立福浜小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	5	5	5	5	5	5	2	31	42
児童数	190	174	174	172	176	164	8	1054	

研究の概要

1. 研究主題

子ども一人ひとりが基礎・基本を身に付ける『学びの道筋』（課題別）

2. 研究内容与方法

(1) 実施学年・教科

全学年算数
 （理由）
 学年が進むにつれて理解の幅が大きくなる
 得意不得意の意識の違いがはっきりしてくる
 系統性がはっきりしている
 児童にも家庭にも今までの学び方の見直しがしやすい

(2) 年次ごとの計画

平成14年度	<p>テーマ 子ども一人ひとりが基礎・基本を身に付ける『学びの道筋』（課題別） - 課題別カリキュラム -</p> <p>研究の見通し（仮説） < 研究仮説1 > 子どもが自らの興味・関心や今までに身に付けた力を発揮しながら、算数科の基礎・基本を身に付けるには、個に応じた『学びの道筋』がある。</p> <p>< 研究仮説2 > ふさわしいタイミングに、自分にとって必要な課題を自らの判断で選択し、繰り返し取り組むと、課題解決する学び方を身に付けやすい。</p> <p>研究の内容・方法 < 仮説1 に対して > 新しい単元に必要な既習事項を確認すれば、新たな単元の学習内容が身に付きやすいのではないかと、また、新しい単元を学習した後に、発展的な課題に取り組めば算数の楽しさを味わったり数学的な考えを深めていったりすることができるのではないかと考えた。そういった点から、子どもの興味・関心を高め、今までに身に付けた力を確認しながら学習を進めていく『学びの道筋』を構築していくことが大切であると考えた。そこで、算数科の目標から以下に示すような学びの道筋を想定し、学習集団を生活集団と同一集団にして一斉に取り組む課題と学習集団を学年TTや少人数など新たな集団を構成して取り組む課題の組み合わせを考え、算数科の基礎・基本が身に付きやすい課題別カリキュラム作りをしていく。</p> <p>< 仮説2 に対して > 与えられた課題より自分で選んだ課題に取り組む方が、学習意欲が高まる。また、今までに身に付けた力を確認した上で自分に必要な課題を選ぶことを繰り返していくと、主体的に課題を選択する力や課題に関わり続ける力などが身に付いていくと考えられる。そこで、各学年の各単元について算数科の基礎・基本が身に付きやすいタイミングを探り、今までに身に付けた力を確認する時間を設定した</p>
--------	---

後，それをもとに自分が必要とする課題を選択し，解決していく授業づくりをしていく。

平成
15
年度

テーマ

子ども一人ひとりが基礎・基本を身に付ける『学びの道筋』(課題別)

- 重要単元の精選 -

研究の見通し

< 研究仮説 1 >

1年生から6年生までの単元の中で重要単元を絞って TT や少人数指導に取り組むと，子どもの学びを6学年の縦軸で育てていきやすくなる。

< 研究仮説 2 >

日常の事象に目を向けた課題に取り組むと，算数に対する興味関心が高まり，数学的なものの見方や考え方が育ちやすい。

研究の内容・方法

< 仮説 1 に対して >

一人の子どもの学びを縦軸を見通して取り組んでいくと，子どもにとって既習事項を意識しながらの取り組みをしやすくなり，学習内容が身につけやすいのではないかと考えた。また，教師もどの学年を担当しても前の学年の内容と次の学年の内容を意識しながら学習を進めていくので，授業を工夫しやすくなるのではないかと考えた。そこで，各学年の単元の中から，担当されている授業時数や内容から吟味して重要単元を設定し，TT や少人数の指導体制を確立していくと共に，自己チェックテストに基づく課題別の取り組みをしていく。

< 仮説 2 に対して >

与えられた課題を解いて，知識や技能などを得るという活動だけでは，学習意欲が高まっていかない。ダイナミックに算数的な活動を取り入れた課題別を行うと感覚を豊かにし，創造的な考え方を養えると考えられる。そこで，算数的な活動を意識した「学びの道筋」B の課題開発をしていく。

平成
16
年度

テーマ

子ども一人ひとりが基礎・基本を身に付ける『学びの道筋』(課題別)

- 確かな学びに対するための授業づくりと家庭学習のあり方 -

研究の見通し

< 研究仮説 1 >

数量感覚が豊かになると，授業だけではなく日常生活のなかでも算数的な要素に目が向くので，算数的な考え方を発揮しやすくなり学びを確かにしていくことができる。

< 研究仮説 2 >

授業と家庭学習をなめらかにつないでいくと，子どもは，主体的な学習者として意欲的に取り組み続け，学びを確かにしていくことができる。

研究の内容・方法

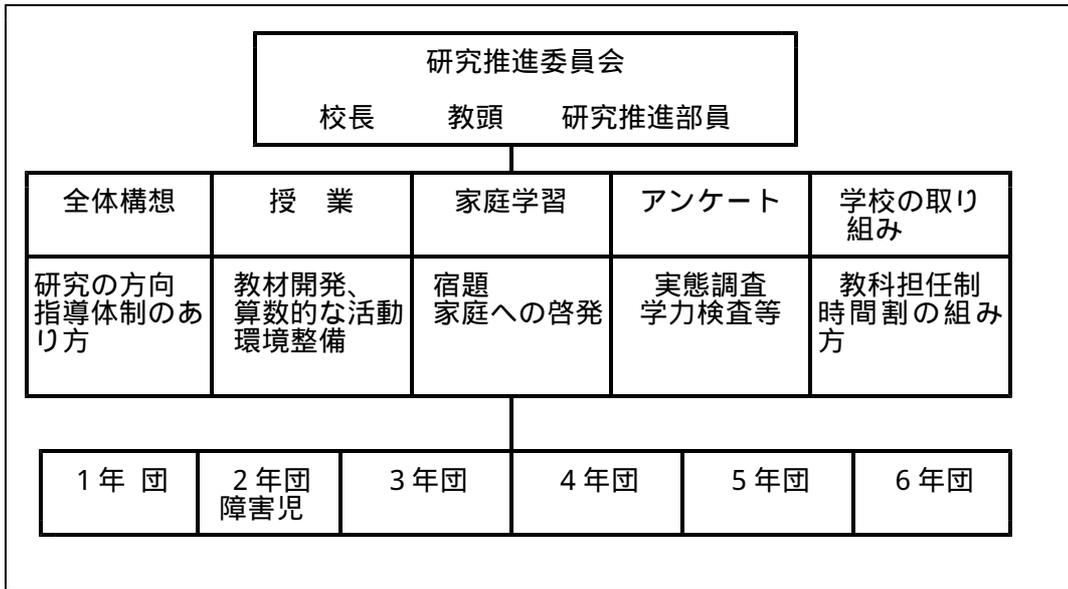
< 仮説 1 に対して >

2年間の取り組みを通して，TT や少人数指導など指導体制を工夫していくと習熟度や子どもの興味・関心に応じた課題に取り組ませやすくなり，学習内容が身に付きやすくなることわかった。また，子ども達の実態から数量感覚が乏しいことも明らかになってきた。そこで，工夫した指導体制の中での算数的な活動を取り入れた授業づくり(教材開発や自力解決の時間の充実など)や，数量感覚を豊かにしていく環境整備をしていく。

< 仮説 2 に対して >

家庭学習は，学習内容を定着するために大変重要である。家庭学習を有効に機能させていくためには，授業と家庭学習をなめらかにつないでいく必要がある。そこで，学年に応じた宿題の内容や量，個に応じた課題などについて明らかにしていく。また，家庭への啓発活動を定期的に行い，家庭も子どもの教育について関心を持ち，学校と一緒に育てていくという本来の姿に気付かせていきたい。

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究の成果

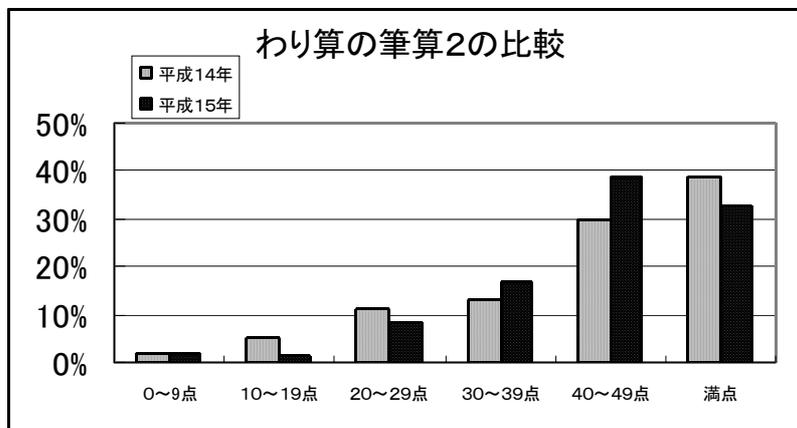
1 4年生，少人数指導での「わり算の筆算2」の比較

4年生では，平成15年度は，平成14年度に行った課題別少人数指導を一部変更した。昨年度は1回のみチェックテストを行い授業を行ったが，本年度は授業の展開にあわせて，3回チェックテストを行い，その結果によって課題別のコースを3回にわたって選択させ授業を行った。そして，同じテストで昨年度と本年度の表現処理の結果を比較した。その結果は以下に示すとおりである。

平均点，標準偏差の比較 50点満点

	平均点	標準偏差
本年度	40.82	13.00
昨年度	39.83	13.23

得点の分布を。その得点範囲内の児童の割合を，パーセントで示すと，下のようなグラフになる。



考察

昨年度と全く同じ問題を使ったので、比較してみると次のような傾向が読みとれる。

- ・上位群の割合が増えている。
40～50点の児童
昨年度 69%
本年度 72%
- ・下位群の割合が減っている。
30点未満の児童
昨年度 18%
本年度 11%
- ・下位群50%の平均点が伸びている。
昨年度 30.83点
本年度 33.45点
- ・平均点が伸び、散らばりが幾分少なくなっている。

すなわち、本年度行った課題別指導の成果がはっきりと見られる。来年度も引き続き課題別少人数指導を推進し、さらに成果を検証していきたい。

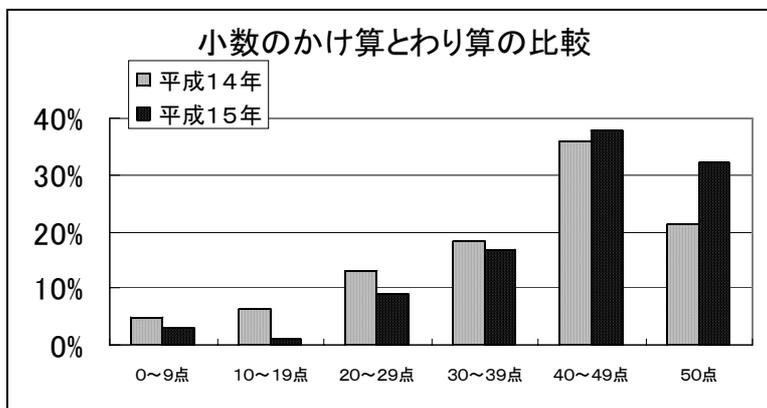
2 5年生 ショート6校時を使った「小数のかけ算とわり算の筆算」の比較

5年生では、ショート6校時を使って、児童を課題別に分け、2年生の先生の協力の下7つの課題別コースを作り、チェックテストをもとに自己選択をさせ、自分の力に応じたコースを選んで学習を進めた。そして、同じテストで昨年度と本年度の表現処理の結果を比較した。その結果は以下に示すとおりである。

平均点、標準偏差の比較 50点満点

	平均点	標準偏差
本年度	40.35	13.00
昨年度	35.98	14.36

得点の分布を、その得点範囲内の児童の割合を、パーセントで示すと、下のようなグラフになる。



考察

昨年度と全く同じ問題を使ったので、比較してみると次のような傾向が読みとれる。

- ・上位群の割合が増えている
40～50点の児童
昨年度 57%
本年度 69%
- ・下位群の割合が減っている
30点未満の児童
昨年度 24%
本年度 13%

・平均点が5点近く伸び、散らばりが幾分少なくなっている。

すなわち、本年度行ったショート6校時を使った課題別指導の成果がはっきりと見られる。短い時間ではあるが、ショート6校時を有効に活用することによって、かなりの成果を上げることができた。来年度も引き続きショート6校時の有効な活用の仕方について研究を進めていきたい。

2. 今後の課題

アンケート結果から

福浜小学校では、本年度1学期末には保護者と児童に、2学期末には1学期とほぼ同じ内容のアンケートを実施し、本年度の取り組みがどのように効果を上げたのか探った。

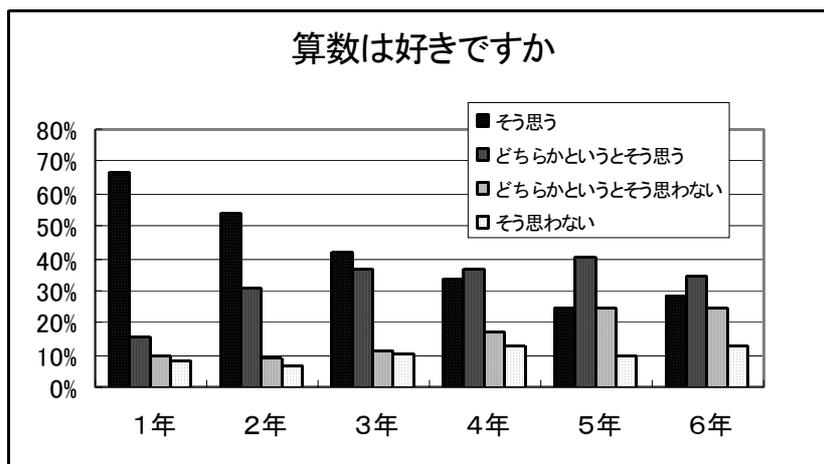
(児童回答者 1学期末は2年生以上 2学期末は全員 児童数約1000人)
「算数は好きですか。」

・「そう思う」「どちらかというと思う」と答えた児童の割合

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	全体平均
1学期		74.3%	79.1%	78.6%	64.6%	60.7%	72.1%
2学期	82.4%	84.3%	78.6%	70.2%	65.5%	63.1%	74.3%

昨年度1学期末は、53%だったものが昨年度末には68%、1学期末には72%（1年生をのぞく）そして2学期末には74%まで算数好きの割合を増やすことができた。研究の成果を感じることができる。

しかしながら、数字でもわかるとおり、上の学年になるにつれて算数嫌いの比率が高くなっていく。教材の難しさもその原因の一つと考えられるが、今後の課題として取り組んでいきたい。



学力等把握のための学校としての取組

定期的な学力調査の実施（年1回）

「数と計算領域」の達成率の検証

今年度、取り組んだ主な単元のテスト結果と昨年度の結果比較

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

研究授業への招待

（岡山市立の小学校の教諭の参加）

（同じ中学校区の小学校・幼稚園の教諭の参加）

研究紀要「課題別グッドジョブ」の配布

（同じ中学校区の中学校、小学校、幼稚園）

（岡山市立の小学校）

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 6学級以下 7～12学級
 13～18学級 19～24学級
 25学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 一部教科担任制 その他
- 【研究教科】 国語 社会 算数 理科
 生活 音楽 図画工作 家庭
 体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無